

2009 年度
国内実地研修報告書

—長野県阿智村に学ぶ村落再生と活性化への方途—

Domestic Fieldwork Report 2009

**The Ways toward Revitalization of Marginalizing Communities,
The Case of Achi Village, Nagano Prefecture**

2010 年 3 月
March 2010

名古屋大学大学院国際開発研究科
Graduate School of International Development
Nagoya University

2009 年度
国内実地研修報告書

—長野県阿智村に学ぶ村落再生と活性化への方途—

Domestic Fieldwork Report 2009

**The Ways toward Revitalization of Marginalizing Communities,
The Case of Achi Village, Nagano Prefecture**

2010 年 3 月
March 2010

名古屋大学大学院国際開発研究科
Graduate School of International Development
Nagoya University

はじめに

国内実地研修は、現場での実践的な教育研究活動を重視する国際開発研究科にとって重要な取り組みの一つであり、海外実地研修とともに研究科共通課目として位置づけられている。その主な目的は、1)「開発現場」を知ることの重要性を実感する、2)フィールド調査の基本的方法や姿勢、調査倫理などを習得する、3)日本の地域開発をめぐる諸問題を学ぶ、4)異なる社会経済的・文化的背景の学生によるグループ活動を通して、国際的環境における共同作業の経験を積む、の4点である。

1995年度の開始以来、愛知県・岐阜県・長野県の自治体に協力を求め研修場所を移動させ、近年は長野県南部の村々を訪れている。2009年度は、昨年に引き続き、長野県下伊那郡阿智村の協力を得て、10月28日から30日にかけて訪問調査、また11月20日には報告会を行なった。参加者は20名（全員博士前期課程1年生、日本人学生5名、留学生15名）、林業・農業・移住(開拓)・教育の4グループに分かれ、教員5名が引率にあたった。また、今年は日本人学生が少なく、コミュニケーションの困難が想定されたため、4名の留学生に通訳として同行してもらった。

阿智村役場は、学生研修を含め、外からの視点で調査することで、村に活力を得ようというスタンスから、本研究科の研修も積極的に受け入れ、サポートしていただいた。当方でも、阿智村での研修も2年目であることから、学生の研修目的を達しつつ、先方の期待にもできるだけ応えるべく、事前打ち合わせを重ねた。その結果、研究科の性格から、課題対応型のグループ編成は変更できないながら、今年度は、グループごとに一つの集落に焦点を当て、集落の特徴的な課題を中心に調査を行うという形になった。阿智村では、伝統的な村の生産活動を維持しつつ、新しいニーズに対応して市場を開拓し、安定した産業を育成することにより、既存の住民の生活安定を図るとともに、新規定住の促進も図ろうとしている。コミュニティの活力を高め、若者を育成していくという意味で、教育などのテーマも重要である一方、満蒙開拓団や戦後の山林開拓の経験を持つ人々の経験を知る貴重な機会もいただいた。

阿智村の岡庭村長をはじめ、村役場、特に協働活動推進課の方々、集落代表者、公的および民間の機関の方々には、ご多忙の中、積極的に協力していただいた。学生にとっては、調査の技法を学ぶだけでなく、村の方々との議論を通じて、山間集落の課題を考える貴重な機会となった。心から感謝の意を表したい。

名古屋大学大学院国際開発研究科
2009年度国内実地研修委員長
山田肖子

Agricultural Products of Achi Village



In front of Achi Village Community Hall



Morning Market



Nonaka san



Preparatory Seminar



WG1



WG2



WG3



WG4



Achi Village Community Hall



目 次

Contents

はじめに.....	1
写真.....	3
2009 年度国内実地研修の概要.....	6
1. 目的.....	6
2. 本年度を含む実施実績.....	6
3. プログラム内容.....	7
4. 担当教官と参加学生の一覧.....	9
5. 本書の構成.....	10

阿智村の概要.....	11
第 1 章 Collaboration between Forestry and Tourism in Tozawa Community.....	13
第 2 章 Sustainable Agriculture in Achi Village.....	35
第 3 章 History of Resettlement and Rural Development in Aomidaira Community.....	53
第 4 章 The Impact of <i>Sanson-Ryugaku</i> on the Participating Students and Local Community: The Case of <i>Namia</i> , Achi Village.....	75

2009 年度 国内実地研修の概要

1. 目的

名古屋大学大学院国際開発研究科は、1995 年以降、正規のカリキュラムの一環として国内実地研修（Domestic Fieldwork、略称 DFW）を実施している。DFW は、1992 年以降本研究科で実施されている海外実地研修（Overseas Fieldwork、略称 OFW）をモデルに考案されたもので、これら二つのプログラムは本研究科が重視する実践教育の支柱となっている。

DFW の主な目的は、日本の地域開発をめぐる諸問題や町おこし・村おこしの取り組みについて現地調査を通じて学ぶことにある。本研究科の修了生の多くは国際開発・協力の実務や研究活動に携わっているが、将来、そうした職務に就く可能性の高い日本人学生や留学生にとって、日本国内での開発事例を学ぶことは発展途上国の開発問題を考える際にも非常に有益であると考えられるためである。そうした学習・調査活動を通して、参加学生が「開発現場」を知ることの重要性を実感すること、そして国際色豊かな構成員でのグループ活動を通して現地調査の基本的姿勢や方法を習得することもまた DFW の重要な目的となっている。

2. 本年度を含む実施実績

これまでの実施実績は下表の通りである。14 回目となる本年度の DFW は昨年同様、長野県下伊那郡阿智村に受け入れをしていただいた。現地調査は 2009 年 10 月 28－30 日に実施され、参加学生は 4 つのテーマ別に分かれて、それぞれの視点から阿智村について多面的理解に努めた。本年度も例年同様、調査終了後に調査地を再び訪れ、結果報告をさせていただいた。それによって調査をお引き受けいただいた村民の方々に直接、調査結果のフィード・バックを行えたこと、そして村役場の方々を中心とする村民の方々に貴重なご意見やご指摘を賜うことができ、大変貴重な機会となった。なお本年度の参加学生は日本人学生 5 名と留学生 15 名の計 20 名で構成された。

■ DFW の実施実績

	年度	研修場所	参加学生数（内、留学生数）
1	1995 年	愛知県幡豆郡一色町	10（4）
2	1996 年	愛知県幡豆郡一色町	13（8）
3	1997 年	愛知県加茂郡足助町	19（11）
4	1998 年	愛知県加茂郡足助町	25（14）
5	1999 年	愛知県渥美郡渥美町	36（25）
6	2001 年	愛知県南設楽郡鳳来町	23（14）
7	2002 年	岐阜県郡上郡八幡町	26（18）
8	2003 年	岐阜県加茂郡東白川村	36（16）
9	2004 年	岐阜県加茂郡東白川村	32（15）
10	2005 年	長野県下伊那郡泰阜村	31（17）
11	2006 年	長野県下伊那郡泰阜村	40（19）
12	2007 年	長野県下伊那郡清内路村	25（20）
13	2008 年	長野県下伊那郡阿智村	28（17）
14	2009 年	長野県下伊那郡阿智村	20（15）

（注）2000 年度は研修場所の諸事情により実施されなかった。

3. プログラム内容

DFWのプログラムは、事前研修、ワーキング・グループ（Working Group、以下、WG とする）ごとの調査準備、現地調査、結果報告会の4つの活動から構成される。

■ 事前研修

日時	講師	講義内容
5月27日(水) 16:45-18:15 ＜必須＞	阿智村役場 課長 林茂伸 様	「阿智村の現状と課題」
6月24日(水) 16:45-18:15 ＜必須＞	名古屋大学 西川芳昭教授	「日本の地方行政と清内路村での調査経験」
8月24日(月)－27日(木) ＜選択＞ 集中講義	国際協力銀行 技術顧問 鹿野和子 様	国内実地研修特論：「日本の地域開発経験の途上国への導入可能性」

■ ワーキング・グループごとの調査準備

本年度は、参加学生各自の興味・関心に応じて、林業、農業、移住、教育の4つのWGが設けられた。使用言語は日本語及び英語の両方とし、主に参加学生同士で翻訳や通訳を行った。6月から10月にかけて、各WGは担当教員の指導の下、調査準備を重ねた。それぞれの調査課題の設定、調査時の希望訪問先の選定、詳細な質問事項の作成や調査方法の検討作業を進めた。

グループ	調査課題
WG1 林業	阿智村には豊富な森林資源があり、昼神温泉などの有明な観光資源もある。しかし、村活性化のために両者の連携が十分に発揮されてきたとは言い難い。本調査は阿智村の中でも特にその連携が期待される戸沢集落における林業や観光業の歴史、現状を分析する。そして、両者の連携による村落発展の可能性を探りたい。
WG2 農業	阿智村の農業は基幹産業と位置付けられているにも関わらず、所得の低さ、労働環境の厳しさ等を理由に、後継者不足という根本的な課題に直面している。本調査は智里東を中心に、新規就農者、農家、阿智村役場担当者、農産物加工会社の関係者にインタビューを行い、阿智村にあける持続的農業の意味を探りつつ、農家の所得向上への可能性を提言したい。
WG3 移住	阿智村は現在人口過疎化、高齢化などといった社会問題に直面している。本調査は青見平を中心に第2次世界大戦以降の移住政策の変遷をまとめ、近代における過疎化、高齢化問題の現状理解をした上、今後の移住政策の解決可能性を探りたい。
WG4 教育	本調査の目的は、山村留学プログラムが都市部からの参加者である子供と阿智村のローカルコミュニティに与える影響を解明することである。生徒が山村留学に参加することで得られる利益と地元の生徒、両親、学校が山村留学を提供することにより得られる利益の双方について調査する。また同時に山村留学を行うことによりコミュニティが抱える問題及びその解決策についても検討する。

■ 現地調査

阿智村にて実施された 3 日間の現地調査の詳細は以下の通りである。

	WG1	WG2	WG3	WG4
10 月 28 日 (水) 11:00 -17:00	・村役場表敬 ・村役場山林係 ・村役場学芸員	・村役場表敬 ・村役場定住促進係 ・新規就農者	・村役場表敬 ・村役場定住促進係 ・伍和自治会（青見平集会所）	・村役場表敬 ・NPO なみあい青遊会 ・浪合小学校
10 月 29 日 (木) 9:00 -17:00	・飯伊森林組合阿智村支所 ・地域づくりと観光・林業、青壮年会（戸沢集会所）	・智里東農事法人組合（智里東公民会館） ・営農支援センター、堆肥センター、JA	・戦後開拓の話 ・満州開拓後に移住した方の話（青見平集会所）	・浪合学校の校長先生にインタビュー ・阿智村役場：浪合支所教育担当者と PTA 回 ・浪合学校の生徒
11 月 6 日 (木) 9:00 -15:00	・戸沢地区を歩いて概況を見る ・ガイドセンター：エリアサポート	・農家の聞き取り ・野菜村	・青見平を歩いて概況を見る ・ガイドセンター：エリアサポート	・阿智村教育委員会 ・ガイドセンター：エリアサポート

■ 結果報告会

結果報告会の詳細は以下の通りである。

項目	詳細
日時	2009 年 11 月 20 日（金）13:00-15:00
場所	阿智村役場、コミュニティホール
出席者	役場の方々や調査にご協力いただいた方々
報告者	DFW 参加者
内容	ご挨拶（山田肖子 DFW 委員長） WG1・2 の報告（各 20 分間のプレゼンテーション） 質疑応答（約 10 分間） WG3・4 の報告（各 20 分間のプレゼンテーション） 質疑応答（約 10 分間） ご感想（林茂伸課長・大石真紀子氏） ご挨拶（山田肖子 DFW 委員長）

4. 担当教官と参加学生の一覧

以下の通り、計 20 名の学生が参加した。男性 12 名、女性 8 名の内訳となっている。

グループ担当 教員	No.	氏名	コース	学年	性別	国籍
WG1：林業 川島 富士雄 (5 名)	1	中奥 勝貴 **	DICOS	M1	M	日本
	2	Ryka Claudia Lolita *	DICOS	M1	F	インドネシア
	3	Irene Santi Br Bukit	DID	M1	F	インドネシア
	4	Ismailov Otabek	DICOS	M1	M	ウズベキスタン
	5	Mammadov Emil	DID	M1	M	アゼルバイジャン
WG2：農業 木下 徹 (5 名)	1	福田聖子 *	DID	M1	F	日本
	2	Moch Huda	DID	M1	M	インドネシア
	3	Sengdala Vongmath	DICOS	M1	M	ラオス
	4	Rahimboyer Alisher Rustamovich	DID	M1	M	ウズベキスタン
	5	河野 真理 **	DID	M1	F	日本
WG3：移住 西川 芳昭 (6 名)	1	Yershov Oleg **	DICOS	M1	M	トルクメニスタン
	2	Sai Seng Sai	DID	M1	M	ミャンマー
	3	Hani Rahmat Budi Norkusuma	DID	M1	M	インドネシア
	4	Shruti Lakhera	DICOS	M1	F	インドネシア
	5	畑中 文 *	DICOS	M1	F	日本
	6	An Sokchea	DID	M1	M	カンボジア
WG4：教育 山田 肖子 (4 名)	1	Mansoor Azam	DID	M1	M	パキスタン
	2	Sommala Khamfong	DID	M1	M	ラオス
	3	岩月 彩香 *	DID	M1	F	日本
	4	Oyuntulkhuur Jukov **	DID	M1	F	モンゴル

(注) ** グループ・リーダー * グループ・サブリーダー

DID：国際開発専攻、DICOS：国際協力専攻、DICOM：国際コミュニケーション専攻、M1:修士1年生

5. 本書の構成

本書は、調査地である阿智村の調査協力者をはじめ、国際開発・協力や調査研究活動に関係する約 150 もの国内の諸機関にも送付されている。日本の農村地域における開発事例の貴重な記録としても、本書が有効に活用されることが望まれる。

本書の構成は以下の通りとなっている。4つのグループ別の報告書が森林、農業、移住、教育の順に続く。英語報告には和文要約が、和文報告には英語要約が添付されている。

なお、本書に示された見解、提言、批判などは筆者である学生のものであり、本研究科または担当教官のものではない点にご留意いただきたい。

(文責 Ngov Penghuy)

阿智村の概要

阿智村は長野県南部に位置する山間の村である。面積約 170 平方キロメートル、その 9 割は山林原野で占められている。西は恵那山を境として岐阜県中津川市および木曽郡南木曾町に接し、北は清内路村、東は飯田市、下條村、南は阿南町、平谷村に接している。標高約 500m から 1200m までの山間地に 52 の集落が点在する。人口 7,066 人、高齢化率（65 歳以上人口）は 29.8%（2009 年 5 月現在）、人口は年々減少しており、少子高齢化は今後も進行することが予想される。現在、小学校 5 校、中学校 3 校、県立高校 1 校が村内にあるが、1 校あたりの児童数は 40～190 名であり、中学校 3 校は 2011 年 4 月に合併して 1 つになる予定だが、合併しても全校生徒 250 名の小規模校である。現在、60 集落のうち、15 集落は高齢化率 40% 以上の限界集落及び準限界集落で、住民が安心して暮らしを営むための福祉サービスの提供が課題であると同時に、村の魅力を高め、村を出た人の帰還や新規定住促進などの施策も求められている。

村の沿革を見てみると、近隣の自治体との併合・分離を何度かくりかえして現在に至っている。1956 年（昭和 31 年）のいわゆる昭和の大合併時に、会地村、伍和村、智里村の 3 村が合併し、旧阿智村が誕生した。また 2006 年（平成 18 年）には浪合村と、2009 年 4 月には清内路村と合併した。平成の大合併による地域再編は現在も進行中であるといえよう。合併にともなって生ずる行政組織や学校などの再編、住民生活への影響は今後とも注目されるところである。

村の産業は、昭和 40 年代頃までは稲作や養蚕を中心とした農業が主体であった。その後従事者数は減少したものの、農業が経済・文化・福祉・環境・教育等多分野に関わる産業であることから、村では農業を「基盤産業」と位置づけ今でも重視している。

農業に代わって発展してきたのが製造業である。村が工場誘致に取り組んだ結果、自動車製造関連・プラスチック加工関連企業が進出、1991 年（平成 3 年）には製造品出荷額が約 280 億円に達するまでとなった。

現在村において「基幹産業」と位置づけられているのは観光業である。中核となる昼神温泉郷の歴史は意外と新しい。1973 年（昭和 48 年）、国鉄中津川線のボーリング調査中に温泉が湧出、その後温泉街として発展した。名古屋から中央自動車道を通って 2 時間足らずで到着という利便さのため、これまで中京地区からの観光客が多かったが、今後は関東方面からの集客に力を入れようとしている。その他にも、3 つのスキー場、治部坂高原、園原の里などの施設があり、近隣自治体と比べて観光資源に恵まれているせいもあって、村内従業者の役半分以上が第 3 次産業に従事している。

また観光振興につながる村づくりの取り組みとして、「全村博物館構想」があげられる。これは歴史遺産や豊かな自然、伝承などの多様な資源を結びつけ、地域の魅力を高めていこうというねらいである。

なお村づくりへの住民参加に関しては、阿智村は自治組織の活動が盛んな自治体として各地からの視察が相次ぐようになった。これは岡庭一雄氏が 1998 年（平成 10 年）に村長に就任後（現在 3 期目）推進されてきたもので、住民に自治会の立ち上げを要請、2002 年度末までに 6 つの自治会がつくられた（その後浪合、清内路地区が合併によって加わる）。村の基本理念「住民一人ひとりの人生の質を高められる、持続可能な村づくり」のもとに、村と自治会が対等な関係において、住民の要望や理想にかなった地域づくりを進めるという協働のあり方である。重点施策は（1）地区が行なう事業、（2）村と協働で行なう事業、（3）村がおこなう事業、の 3 つに分類され、年度別の事業実施計画も自治会が作成する。2003 年（平成 15 年）からは 5 ヶ年の地区計画が立てられ、各自治会が作成した地区計画（平成 20 年度—24 年度）は、阿智村の第 5 次総合計画にも組み込まれている。

その他全村的な課題について住民参加を促す制度として「村づくり委員会事業」がある。これは 5 人以上の住民が集まれば村づくり活動の支援が受けられるという開かれた仕組みで、障害者の通所授産施設の建設や図書室の開設もこの制度を利用して進められた。

このように、少子高齢化という他の中山間地域に共通する問題を抱えながらも、観光資源や歴史文化遺産に恵まれ、また活発な住民自治活動による村づくりのあり方が注目されるなど、阿智村の地域開発には興味深い取り組みがいくつも見出せる。今後とも他の自治体関係者や学生・研究者たちの訪問が続きそうである。

参考文献

阿智村『阿智村第 5 次総合計画』

阿智村役場[2009] 『阿智村の統計 2008』

阿智村役場[2007] 『阿智村住民生活ガイドブック』

阿智村ホームページ <http://www.vill.achi.nagano.jp/>

（最終アクセス 2009 年 12 月 11 日）

岡庭一雄、佐々木正義[2005] 「阿智村の住民自治組織について」『住民と自治』511

佐々木正義[2007] 「住民と行政の協働による自立の村づくり」(全国町村会「町村週報」2618)

<http://www.zck.or.jp/forum/forum/2618/2618.htm>

林茂伸[2009] 『阿智村：住民一人ひとりの人生の質を高められる、持続可能な村づくり』

（国内実地研修事前講義資料）(2009 年 5 月 27 日)

文責： 山田肖子